

TS（トータル・サティスファクション）を目指して②⑨

森保監督と「覚悟」、「気働き」

校長室担当より

「森保メモ」をご存じでしょうか。今回のワールドカップで強豪国ドイツやスペインを撃破するという大きな結果を残した日本代表に関する記事の中でも大きな注目を集めました。実は、一緒にサッカーを指導してきた私が最も尊敬するある先生は、私と出会った24年前に、裏紙をクリップで束ねたメモを手に持ち、これと同じことをされていました。私もそれをお手本にしてやってみようとしたのですが、これがなかなかうまくいきません。何が足りないのか、これをどう使えばいいのか、わからなかったのです。

今よく考えてみると、私に足りなかったのは「自分で背負う覚悟」だったように思います。「答えは自分で考える。」「試合が始まったら誰も助けてはくれない。」ということを経験して感じていなかったのです。おそらく森保監督に倣い、多くの指導者はメモ帳を手にする方も場面も増えることと思いますが、そこに物事に対して「自分で背負う」という意識がないと本当の意味で結果を出すものにはならないと思います。メモをとる森保監督が行ったことは、まず選手の特性を熟知し、普段の行動や言動に常に神経をとがらせ、観察・承認し、24時間それを頭の回路ではつないでおくこと。そして試合では場面ごとに現象を観察し、見極めて判断し、パートナーシップをもって彼らの心に響く言葉で伝えていくという通常では考えられないくらいの膨大かつ繊細な作業です。これだけのことを「自分で背負う覚悟」をもって初めて、こんなにも人々を感動させる大きな結果として現れたのだと感じています。本当に高い「プロ意識」を感じざるを得ません。

この「自分で背負う覚悟」と「自分で考えて判断する力」はどんな分野にも求められることです。実際、私たちの教育現場でも、サッカーの試合と同じで、いつ何が起こるかわかりません。例えば、児童生徒が不安定な状況が生まれた時に、どこにどんな状況が生まれているかを素早く把握し、その前段階では何があったのかをその子を最もよく知っているのは自分だという覚悟で判断し、必要な対応を即座にできなければ、二次的・三次的に悪化した状況へとつながりますし、その場しのぎでバタバタ動けば、さらに児童生徒を不安定にしてしまうこともあります。

だからこそ、この現場に立つ私たちに「自分で考えて判断する力」が備わっていないとなりませんし、「気働き」をする力が必要となります。「気働き」とは、さりげなく全身全霊で先を読むことです。例えば、教室において、「ああ、あの子はいまこのタイミングで立ち上がろうとしているのだから、本当はこうしたいと思っているだろう。」ということが、他人から言われなくても自分で判断できるように、何も起こっていない平素から気を走らせることです。そう考えると、常に「気働き」をしながら、その子の特性やその場面に合った適切な言葉かけや支援を自分で考えて判断して行うことが当然のように求められる私たちは、あのワールドカップという高いプレッシャーのかかる場において力を示した森保監督と同じ「プロ意識」を持つべき環境にあると言えそうです。

最後に繰り返しとなりますが、お互いが少し譲る部分をもちながらもベストな状況を生み出すために、我々教職員、児童生徒・保護者の皆様は、対等な立場でパートナーシップをもって接するべき大切な存在です。このことをさておいて何も生まれません。森保ジャパンに続いて、世界に誇れる学校を創りましょう、一緒に。(令和5年1月11日)

本校教職員として目指す方向性（確認）

※4月1日にお願ひしたこと

- 1 トータル・サティスファクションの実現
- 2 学びに向かう力をもつモデルを率先垂範
- 3 対話とパートナーシップに基づく行動
- 4 全教職員で全校の児童生徒を見守るチームの実現
- 5 「今さえ、ここさえ、自分さえよければいい」の3悪の撲滅

